

風船爆弾作戦と本土決戦準備 ―80年前の登戸研究所―

明治大学平和教育登戸研究所資料館長 山田 朗（文学部教授）

はじめに（本報告の目的）

- [1] 80年前（1944-45年）登戸研究所最大のプロジェクト：風船爆弾の開発と実戦投入
- [2] 「決戦兵器」風船爆弾は、どのような意図のもとに計画・開発・製造されたのか？
 - 風船爆弾が「決戦兵器」である理由、搭載予定兵器の変遷、作戦の顛末
- [3] 風船爆弾作戦の時期＝「本土決戦」準備の時期
 - 登戸研究所における「本土決戦」準備、敗戦後の証拠隠滅
- [4] 風船爆弾製造に動員された女学生たちの置かれた状況、肉声については、
本年11月3日に第78回毎日出版文化賞を受賞された
小林エリカさんの『女の子たち風船爆弾をつくる』（文藝春秋、2024年5月）と
企画展展示パネルをご覧ください。 ※以下→【展示】は企画展展示の必見のポイント

I 日本軍のアジア太平洋戦争「戦勝」シナリオ

1 アジア太平洋戦争開戦前の「戦勝」シナリオ

- [1] 1941年9月段階：ドイツ依存の開戦戦略
 - 日・独・伊が結束して**英国の脱落**を図る
 - 米国世論の転換**、蒋政権屈服等により戦争終結 → 【資料1】
- [2] 1941年11月段階：**独ソ講和斡旋**により独軍を英国に向かわせる → 【資料2】
 - 開戦直後の奇襲攻撃によって米国民の戦意を喪失させる。
 - 南方資源地帯を確保して持久し、欧州戦線の転換（英国敗北）を待つ。
 - 英国の脱落によって米国民の継戦意欲を失わせ、戦争終結に持ち込む。

2 開戦後の「戦勝」シナリオの挫折

- [1] 戦術的勝利と戦略的手詰まり
 - 英・米側の準備不足に乗じて戦術的には勝利し、南方資源地帯を確保
 - しかし、**独ソ講和斡旋は失敗（中止）、米戦意の喪失にも失敗**
- [2] 英崩壊を促進する戦略（大本営主導）
 - 1942年4月～ 機動部隊、インド洋へ（インド沿岸・セイロン空襲、英海軍の駆逐）
- [3] 米への圧力を強化する戦略（連合艦隊主導）への転換とその挫折
 - 1942年5月～ 機動部隊、太平洋へ（珊瑚海・ミッドウェー海戦）、米豪遮断めざす
 - ミッドウェー海戦敗北と米軍のガダルカナル島上陸（1942年8月）で攻勢挫折
 - 以後、ソロモン・ニューギニアでの大消耗戦に陥り、戦略的な能動性を喪失

II 「決戦兵器」風船爆弾の開発

1 参謀本部による「決戦兵器」開発要請

- [1] ミッドウェー海戦（1942年6月）後、参謀本部による「決戦兵器」開発要請
 - 参謀本部作戦課「決戦兵器考案に関する作戦上の要望」（1942年8月15日）
- [2] 「要望」の全般的特徴 → 【資料3】【展示】
 - 決戦兵器＝「決勝を求むる兵器」＝「戦闘に於て最後の勝利を獲得せんとするもの」**

実現希望時期「1.2 年以内」、「数年以内」、「将来において」、「その他」に分類
戦場における勝利とアメリカ国民の戦意喪失が重点
国際法違反の感覚なし（どのような手段を使っても勝てば良いという発想）

[3] 石井部隊（731 部隊）の拡充を強く要望

「1.2 年以内」：「ノ」号の改良（PX= ペストノミ）

「数年以内」：「耕作地を焦土たらしむへき薬品」（下記）

「敵側抗戦意志屈服の為神経戦兵器の考案」

「将来において」：「敵性民族剿滅兵器の考案」

[4] 対米屈服・米国民の戦意を喪失させる兵器（「数年以内」の実現希望） → 【展示】

①「超遠距離飛行機の考案設計」→「富嶽」（中島飛行機）の開発 ×

②「特種気球（「フ」号装置）の能力増大／太平洋横断を可能ならしむ」→ 風船爆弾○

③「パナマ運河閉塞手段の考案」→ 伊号 400 型潜水艦（海軍）の開発△

④「耕作地を焦土たらしむへき薬品」→ 食糧生産への壊滅的打撃を狙う

→ 穀物類を枯らす細菌、家畜を殺傷する細菌・ウイルスの開発 ×or △

2 対米「決戦兵器」としての風船爆弾の開発

[1] 日本陸軍と気球

西南戦争（1877 年）のために係留式 有人 観測気球を試作（戦後に浮揚実験）

日露戦争（1904-05 年）旅順攻防戦で係留式有人観測気球（国産）を使用

1910 年代に自由飛行式気球＝飛行船が登場（ただし WWI 以後に衰退）

1930 年代までは砲兵部隊に属する係留式有人水素気球が弾着観測に使用される

1940 年代には世界的に係留式無人水素気球が局地防空用に使用される（阻塞気球）

[2] 気球爆弾＝「ふ号」兵器の開発

→ 【展示】

1930 年代： 関東軍と国産科学工業が直径 4m・射程 100km ほどの気球爆弾を開発

気球本体：和紙（埼玉県小川町産）とコンニャク糊（以後、同じ）

搭載兵器：通常爆弾

1939 年：登戸研究所第一科で「せ号」（宣伝）兵器として気球開発を継承

搭載物： 宣伝ビラ

[3] 「ふ号」兵器の能力向上

1942 年 8 月：参謀本部「決戦兵器考案に関する作戦上の要望」

陸軍（和紙）・海軍（ゴム）気球がそれぞれ開発

直径 6m・射程 1,000km 気球を開発（潜水艦で米西海岸近海で発射を想定）

1943 年 3 月：海軍が潜水艦の使用を拒絶

1943 年 8 月：陸軍兵器行政本部、太平洋横断型「ふ号」の開発を命令

登戸研究所第一科で気球本体と高度維持装置の設計

第二科で搭載兵器＝生物兵器の開発

第三科で和紙量産のための技術開発

1943 年 11 月：直径 10m・射程 10,000km、試作気球の完成

1944 年 2 月 11 日～：1 日 10 発、試作気球 250 発の放球実験（千葉県一宮・鷺海岸）

試射だが、実際に焼夷弾を懸吊

天皇にも報告され、天皇はソ連方面に落下することはないか質問

→ 【資料 4】

3 搭載予定兵器の変化＝「決戦兵器」風船爆弾の性格の変容

〔1〕第 1 段階：731 部隊が開発したペスト菌（PX）の搭載を想定

- 「ふ号」プロジェクトに 731 部隊関係者も参加 → 【展示】
内藤良一（当時：軍医中佐）・金子順一（当時：軍医少佐）
- 「決戦兵器」（大量破壊兵器）としての風船爆弾
- 「ふ号」の飛行高度（約 10,000m）では細菌類は使用できないことが判明

〔2〕第 2 段階：牛疫ウィルスの搭載を想定

- アメリカ合衆国の食糧（食肉）生産に打撃を与える
- 1943 年 4 月：第二科第七班に久葉昇技術少佐が着任 → 【資料 5】【展示】
満州の関東軍軍馬防疫廠（100 部隊）・陸軍獣医学校などとも共同
- 牛疫ウィルスの兵器化（1944 年 5 月散布実験に成功、牛 10 頭死亡）
風船爆弾に搭載した牛疫ウィルス 20 トンによる米国牛殲滅計画
- 準「決戦兵器」（謀略兵器・準大量破壊兵器）としての風船爆弾：性格がやや変化

〔3〕第 3 段階：通常爆弾・焼夷弾の搭載

- 搭載重量は 35Kg まで
15kg 爆弾、12kg 焼夷弾、5kg 焼夷弾を組み合わせ搭載
- 謀略兵器（ゲリラ戦的破壊兵器）としての風船爆弾：性格が大きく転換

4 生物兵器搭載の中止について

〔1〕中国戦線での化学兵器使用に対して米大統領からの 2 度の警告 （1942 年 6 月、1943 年 6 月）

〔2〕中国の衡陽戦における日本軍の毒ガス使用に対する中国側の抗議・警告 （1944 年 6 月 30 日）

〔3〕大本営陸軍部、アメリカが毒ガスを使用する可能性ありと判断（1944 年 7 月）

- 米側に毒ガス使用の口実をあたえないため、中国での毒ガス使用禁止を命令（7 月 15 日） → 【資料 6】
- 化学兵器・生物兵器の組織的使用は中止（毒ガスの製造も一旦中止）
- 風船爆弾への生物兵器搭載も中止に（7 月 or 9 月に決定されたと推定される）

〔4〕9 月中止決定説（久葉昇手記）も → 前掲【資料 5】

- 9 月だと東条は参謀総長ではない（7 月に梅津美治郎に交代）

Ⅲ 「決戦兵器」風船爆弾の製造

1 気球本体の開発（全国的な和紙産業の動員）

〔1〕和紙：第三科・巴川製紙で素材研究・試作 → 試作は埼玉県小川の「細川紙」で

〔2〕全国の和紙（楮を原料とした手漉き和紙）産地を大動員して調達

埼玉（小川「細川紙」）・岐阜・石川・鳥取・愛媛・高知（「典具帖紙」）・福岡のちに山梨・福島・福井なども動員

〔3〕コンニャク糊：コンニャクの生産・流通を全面的に統制

〔4〕和紙貼り重ね・貼り合わせ・化学処理：

和紙を 3 重～5 重程度に貼り重ね、苛性ソーダとグリセリンで処理してゲル化

〔5〕和紙を小片から大片に貼り合わせていく作業

主に女学生（勤労奉仕）による手仕事 → 体験談【展示】

→ 貼り合わせが不完全だと気球本体の膨張試験（満球テスト）で破裂

2 高度維持装置

〔1〕気圧計で高度低下を感知してバラスト（2.7kg×28 個）を自動的に投下するシステム

→ 気球の太平洋横断には 2 昼夜半かかるので、夜間には気球が収縮して高度が低下

→ バラストを落として自重を低下させ、浮力を回復する。

〔2〕過酷な条件下でも作動するように、バラストの懸吊索は火薬によって焼き切る。

→ 火薬に着火するためにバッテリーを搭載

3 量産体制

気球本体の量産

→ 全国の和紙産地（1944 年 4 月～）

→ 全国 100 校の女学校を動員（和紙貼り重ね・貼り合わせ、1944 年 7 月～）

→ 組み立て作業：軍工廠・劇場・講堂

（東京の場合：日劇・東京宝塚劇場・国技館・浅草国際劇場・有楽座など）

4 科学技術・民間人の動員を可能にしたもの

〔1〕国民監視・国民動員体制の構築

軍機保護法改正（1937 年 8 月 14 日）→ 最高刑が死刑に

〔2〕国家総動員法（1938 年 4 月 1 日公布）

戦時における人的・物的資源の管理・統制運用についての包括的委任立法

→ 科学技術と民間人（民間企業）を「国家総動員業務」に動員

→ 国民徴用令・学徒勤労働員令など各種勅令が制定される

〔3〕学徒勤労働員体制の強化（閣議決定）

→ 【展示】

Ⅲ 風船爆弾作戦の概要

1 放球基地の設定

〔1〕放球実験（1944 年 2 月～）の結果、偏西風にのせるには千葉県・茨城県・福島県の太平洋岸が適地と判明

〔2〕千葉県一宮・茨城県大津（聯隊本部）・福島県勿来に放球基地（大隊）を設定

2 実施部隊の編成

〔1〕大本営陸軍部、気球聯隊を参謀総長の直属部隊として編成完結（1944 年 9 月 25 日）
隊員は約 2,000 名、聯隊本部 3 個大隊（7 個中隊＝14 個小隊＝42 個分隊＝発射台）
ほかに通信隊・気象隊・材料廠、試射隊（一宮）、標定隊（一宮・宮城県岩沼・青森県古間木）

〔2〕「概ネ十月末迄ニ攻撃準備ヲ完了スヘシ」と命令（9 月 30 日）

3 作戦の実施

〔1〕風船爆弾による米本土攻撃の大本営命令は、レイテ決戦に呼応して 10 月 25 日発令

→ 【資料 7】【資料 8】【資料 9】【展示】

→ 11 月 3 日明治節を期して放球開始（予定は 15,000 発、1945 年 4 月までに 9,300 発放球）。

→ 約 1,000 発が北米大陸に到達と推定される（確認されたもの 361 発）。

→ オレゴン州で 6 名死亡、各地で山林火災発生

〔2〕日本軍側でも事故（搭載爆弾の落下等）により犠牲者（大津・勿来）が出る

4 アメリカ側の対応・反応

- [1] 気球の捕獲 → 構造を解明
 - 現在、米スミソニアン博物館とカナダ軍事博物館は風船爆弾の実物を所蔵
- [2] 日本軍の生物化学兵器使用を警戒
- [3] 報道管制によってパニックを防止
- [4] 日本側は米国発表の傍受によって不発弾（不時着）が出ていることを確認（1944年12月21日） → 【資料10】
『朝日新聞』1945年2月18日付の報道（中国など外国経由の情報として）
「風船爆弾 アメリカ本土を脅かす 時速二百哩で襲撃」『東京朝日』
「我が新兵器攻撃に全米戦慄 気球爆弾 米本土へ 時速二百哩 殺傷既に五百」『大阪朝日』 → 【展示】

5 「ふ号」の兵器としての評価

- [1] 破壊力・命中精度が期待できず
 - 量によってそれらを補うこともできず
 - 結果的（戦後）に「無差別攻撃兵器」として批判されることに
- [2] 生物兵器の不搭載
 - 「決戦兵器」にも「大規模謀略兵器」にもならず
 - 結果的に、戦争の歴史にさらなる「汚点」を残すことなく済んだ
- [3] 季節限定の兵器（偏西風が強い11月～3月頃しか使用できず）
 - それを克服するために15m気球を試作（1945年2月頃）するも失敗
- [4] 本来、制式兵器として採用されない類のもの
 - 開発・生産・実戦投入されたのは、米本土を直接攻撃できる唯一の兵器であったから大型爆撃機「富嶽」の挫折、伊号400潜水艦の建造遅延など

IV 「本土決戦」と登戸研究所

1 本土防衛から「本土決戦」構想の誕生

- [1] 「本土決戦」構想の出現
サイパン陥落直後の「陸海軍爾後ノ作戦指導大綱」（1944.7.21）
捷号作戦計画：「本土決戦」を一つの作戦の選択肢として決定
他に比島方面、「連絡圏域」＝沖縄・台湾方面、千島・北海道方面での「決戦」に想定
1944.10を目途として「決戦準備ヲ概成スル」とした
- [2] 作戦準備進捗せず
南方資源地帯から日本本土への海上輸送路が脅かされ、本土の物資不足深刻に
東部軍司令部は10.13にようやく沿岸築城（砲台・レーダー基地）の開始を命令
- [3] 「レイテ決戦」（捷一号作戦）の発動（10.18）により、「本土決戦」準備はさらに遅延

2 「本土決戦」準備の本格化（1945.1～）

- [1] 「レイテ決戦」断念（1944.12）後、「本土決戦」準備は本格化
「帝国陸海軍作戦計画大綱」（1.20）「皇土特ニ本土及朝鮮ノ作戦準備」「本年初秋迄ニ概成ス」と決定
- [2] 「本土決戦」作戦計画の策定
大本営陸軍部「国土築城実施要綱」発令（3.16）

1945.7までの全陣地の骨格完成、1945.10までの完成を命ずる

大本営陸軍部「決号作戦準備要綱」発令（4.8）

〔3〕「本土決戦」のための兵力総動員

敗戦時、陸軍は内地・朝鮮に294万の兵力を展開

- 新たに150万人を徴集・召集して部隊を編成（装備劣悪・練度も低い）
- 内陸防御作戦から次第に水際防御作戦へと逆戻り
- 第1線部隊は水際で「玉砕」を想定

〔4〕「本土決戦」のための労働力（補助兵力）総動員

義勇兵役法の公布（6.23）：国民義勇隊・国民義勇戦闘隊の組織

- 「本土決戦」のための労働力兼補助戦力（沖縄戦における防衛隊と同じ方法）

〔5〕大本営陸軍部『国民抗戦必携』（4.25）

→ 【展示】

3 敗戦と証拠隠滅

〔1〕「玉音放送」よりも前に陸軍省より処分命令

→ 【資料11】【展示】

「ふ号及登戸関係」 → 「敵ニ証拠ヲ得ラル、事ヲ不利トスル特殊研究」

〔2〕書類・兵器の焼却・破壊

製造物処分の過程で「毒入りチョコレート」誤飲事件起こる（中沢国民学校）

登戸でも書類・兵器の焼却・破壊（戦車で潰す）

印刷機の移動（廃棄？）、偽札の焼却、灰を多摩川に投棄

おわりに（本報告の結論）

- 〔1〕風船爆弾は、大量破壊を狙う「決戦兵器」として開発が始まった。
- 〔2〕日本軍は戦況が悪化する中で、米側の報復を恐れて風船爆弾の性格を転換した。
- 〔3〕効果が疑われる作戦のために多くの女学生等が動員された。

【参考文献】（刊行順）

- 〔1〕日本兵器工業会編『陸戦兵器総覧』（図書出版社、1977年）
- 〔2〕木下健蔵『消された秘密戦研究所』（信濃毎日新聞社、1994年）
増補改訂版『日本の謀略機関 陸軍登戸研究所』（文芸社文庫、2016年）
- 〔3〕吉野興一『風船爆弾―純国産兵器「ふ号」の記録―』（朝日新聞社、2000年）
- 〔4〕伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版、2001年、新装版2010年）
- 〔5〕海野福寿・渡辺賢二・山田朗編『陸軍登戸研究所―隠蔽された謀略秘密兵器開発―』（青木書店、2003年）
- 〔6〕松野誠也『日本軍の毒ガス兵器』（凱風社、2005年）
- 〔7〕櫻井誠子『風船爆弾秘話』（光人社、2007年）
- 〔8〕渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦』（吉川弘文館、2012年）
- 〔9〕明治大学平和教育登戸研究所資料館編『陸軍登戸研究所〈秘密戦〉の世界』（明治大学出版会、2012年）
- 〔10〕山田朗『近代日本軍事力の研究』（校倉書房、2015年）
- 〔11〕中脇初枝『伝言』（講談社、2023年）
- 〔12〕小林エリカ『女の子たち風船爆弾をつくる』（文藝春秋、2024年）
- 〔13〕小河孝・加藤哲郎・松野誠也『検証・100部隊―関東軍軍馬防疫廠の細菌戦研究』（花伝社、2024年）

【資料 1】参謀本部の判断 対英米戦争の見通し 1941 年 9 月 6 日

対英米戦争は長期大持久戦に移行すべく戦争の終結を予想することは甚た困難にして特に米国の屈服を求むるは先づ不可能と判断せらるるも我南方作戦の成果大なるか英国の屈服等に起因する米国輿論の大転換に依り戦争終末の到来必ずしも絶無にあらざるへし 何れにするも南方要域を占領して戦略上優位の態勢を確立すると共に南方の豊富なる資源を開発し東亜大陸に於ける経済力の利用と相俟つて長期自給自足の経済態勢を整備し且独伊と提携し米英の結合を破摧して亜欧を連絡する等により不敗の態勢を確立し得べく此の間情勢を利導し戦争を終熄に導き得るの光明を認め得へし

出典：参謀本部「帝国国策遂行要領ニ関スル御前会議ニ於ケル質疑応答資料」、参謀本部編『杉山メモ』（原書房、1967 年）上、322 頁。原文カタカナ。

【資料 2】大本营政府連絡会議決定「対米英蘭蔣戦争終末促進に関する腹案」1941 年 11 月 15 日
方 針

一 速に極東に於ける米英蘭の根拠を覆滅して自存自衛を確立すると共に更に積極的措置に依り蔣政権の屈服を促進し独伊と提携して先づ英の屈伏を図り米の継戦意志を喪失せしむるに勉む

二 極力戦争相手の拡大を防止し第三国の利導に勉む

要 領

一 帝国は迅速なる武力戦を遂行し東亜及西南太平洋に於ける米英蘭の根拠を覆滅し戦略上優位の態勢を確立すると共に重要資源地域並主要交通線を確保して長期自給自足の態勢を整ふ

凡有手段を尽して適時米海軍主力を誘致し之を撃滅するに勉む

二 日独伊三国協力して先づ英の屈伏を図る〔中略〕

三 日独伊は協力し対英措置と並行して米の戦意を喪失せしむるに勉む〔中略〕

五 帝国は南方に対する作戦間極力対「ソ」戦争の惹起を防止するに勉む

独「ソ」両国の意嚮に依りては両国を媾和せしめ「ソ」を枢軸側に引き入れ他方日蘇関係を調整しつつ場合に依りては「ソ」聯の印度「イラン」方面進出を助長することを考慮す

出典：参謀本部編『杉山メモ』（原書房、1967 年）上、523-525 頁。原文カタカナ。

【資料 3】参謀本部作戦課「決戦兵器考案に関する作戦上の要望」1942 年 8 月 15 日

世界戦争完遂の為決戦兵器の考案を要望す

決戦兵器とは決勝を求むる兵器の意にして敵の各種攻撃法を制し或は敵を奇襲急襲して常に敵の技術的手段を凌駕し適切なる運用と相俟て戦闘に於て最後の勝利を獲得せんとするものなり

従て差し当り航空機、戦車、火砲等現用兵器に於て敵に一步を先んずる如き大威力のものを考案することも極めて緊要にして之に対し大なる努力を払ふべきは固よりなるも、敵の未だ企図せざる奇襲刷新兵器を創案し現有兵器を無価値たらしめ以て一挙に勝を求むる方策に關しても亦深く研究を要望する次第なり 以下主として後者に関し統帥部の所期する作戦上の要望を呈示す

第一 一兩年以内に実現を要望するもの

一、海面上よりする敵国航空母艦、航空機、潜水艦等の攻撃に対し之を積極的に海上、空中等に於て撃滅すべき新兵器の考案

1、警戒装置〔中略〕／2、攻撃兵器（特種快速艇）〔中略〕

二、大陸方面に対する航空撃滅戦指導の為、敵空軍を其所在飛行場附近に於て空地より之を完全に撃滅し得る奇襲兵器の考案

敵飛行場に強行着陸し若は低空攻撃に依り敵飛行機を直接攻撃撃滅するを目的とする一種の飛行戦車の考案を必要とす〔中略〕

三、交通破壊戦に於て必勝を獲得する為、敵艦船を拿捕し若は之を撃滅すへき新兵器の考案並不沈艦船及超遠距離海上筏の考案

1、攻撃用兵器〔中略〕／2、防禦兵器〔中略〕

四、長遠なる交通線特に鉄道破壊の為の考案

鉄道線路上に簡単に離着陸可能なる飛行機を考案し所要方面に奇襲着陸して敵の連絡線を

遮断し若は敵の背後を急襲す

五、超遠距離上陸作戦の為、特種上陸兵器及舟艇の考案

敵の抵抗を排除しつつ超遠距離上陸作戦を実施する為には敵の搜索を回避して敵を奇襲し且つ相当の威力を以て強攻し得ること必要なり

- 1、潜水戦車〔中略〕／2、大型高速潜水艦〔中略〕／3、上陸作戦用水陸両用戦車〔中略〕

六、要地防空用兵器

高速大高度飛行機に対し効力を期待し得る如く命中精度良好なるもの若は必ずしも命中せずとも有効なる兵器の考案を必要とす〔中略〕

七、敵性国家の民生に対し其の戦意を喪失せしむべき技術的手段の考案

国民の生活必需品中某々品目を限り極度に逼迫せしめ若は人に対し直接苦痛を与へ以て厭戦感を惹起せしむ

之か為現石井部隊の拡充改善、「ノ」号の改良等を図るを可とす

八、電波戦兵器の画期的改善

- 1、高速度超短波無線電信、電話の拡充改善〔中略〕
2、敵の有線及無線通信系統を攪乱し、若は是等通信器材を破壊す〔中略〕

第二、数年以内に実現を要望するもの

一、対米屈服、英本土、欧「ソ」等奇襲の為、遠距離空襲、若は上陸用兵器資材の考案並是等国民の戦意を喪失せしむるに足る各種技術的手段の考案

- 1、超遠距離飛行機の考案設計を必要とす 之が為
イ、成層圏飛行の完成／ロ、特種「ロケット」の研究／ハ、無甲板高速航空母艦（註、「カタパルト」により離艦し風洞内に着艦する等）の考案等を必要とす

- 2、特種気球（「フ」号装置）の能力増大

太平洋横断を可能ならしむ

- 3、「パナマ」運河閉塞手段の考案

潜水艦若は航空機等に依り特種吸着爆雷を同運河に運搬し其の艦船等の通貨に際しては自動的に吸着爆発せしむる如くす

- 4、耕作地を焦土たらしむべき薬品

二、敵側抗戦意志屈服の為神経戦兵器の考案

- 1、人体の神経系統を不知不識の間に麻痺若は攪乱せしむる薬品若は瓦斯体の考案
2、人体の視覚を刺激し眼に対し特種の不快感を与ふる如き特種光線若は特種電波の考案（なし得れば不可視光線を可とす）
3、「ラジオ」等を通じ人体の聴覚に特種の不快感を与ふる如き音声を発せしむる考案
4、不眠薬の考案
5、石井部隊〔731 部隊〕の拡充

第三、少々遠き将来に於て実現を希望するもの

一、敵性民族剿滅兵器の考案

- 1、石井部隊の拡充改善
2、人体の局部機関中の何れかを不能ならしむべき薬品若は兵器の考案
イ、視覚を刺激し盲目ならしむる光線若は電波又は薬品
ロ、聴覚を不能ならしむべき音波若は薬品
ハ、生殖器を不能ならしむべき電波若は光線又は細菌
ニ、嗅覚を不能ならしむべき瓦斯体

第四、其他（努めて急速に）〔中略〕

結言

上述の如き決戦兵器考案の為には従来型の型に捉はるることなく広く衆知を集ムルを要すべく、能ふ限りの人と金と施設とを動員し可及的速かに之を完成するを要す 従て単に陸軍関係のみならず海軍並民間技術界を大同的に統合し且之に為し得る限りの予算と物並施設を与へ、今日の世界戦争に応じ得しむるを要す

出典：国立公文書館アジア歴史資料センター Ref. C13071041500。原文のカタカナをひらがなに、旧字を新字に改めた。「／」は原文の改行を示す。

【資料 4-1】『昭和天皇実録』1944 年 2 月 5 日

午前、御学問所において内閣総理大臣兼陸軍大臣東条英機に約一時間にわたり謁を賜う。首

相としての東条より帝国議会の状況、去る二日の大本営政府連絡会議において決定の当面の対ソ施策に関する内奏を受けられる。ついで陸軍大臣としての東条より人事内奏、並びに新兵器風船爆弾に関する奏上を受けられる。

出典：宮内庁編修『昭和天皇実録』第九（東京書籍、2016年）285頁。

【資料4-2】陸軍侍従武官『坪島文雄日記』1944年2月5日

一、特種兵器運用に関し大臣に代り武官長より五日上奏せし所 技術上の問題に付御下問あり（ソ聯に誤り落下し外交問題を惹起せざるや）

本日軍事課国武少佐来府説明を与へたり 尚陸軍次官並参謀本部第一部長に付き左記を確認せり

- (1) 陸軍大臣は之を予定の如く使用するの決意なり（二五〇、焼夷弾、二月一日より毎日十発、一万米の西風二〇〇米、太平洋八千軒 東京 ― ワ間一万三千軒、六十時間、直径十米日本紙、水素 二〇〇珎、毎秒二、三〇〇米、三〇分にて一万米に上昇）
- (2) 兵器の整備、試験は陸軍大臣、敵地に運用は参謀本部 今回は最初にして兵器の試験なれば陸相より上奏せるも其結果に対しては大臣総長共に責任をとるものとする
- (3) 海軍側とは協調困難なるを以て歩調を全することをなさざるものとする

出典：陸軍侍従武官『坪島文雄日記』1944年2月5日の条（国立国会図書館憲政資料室所蔵）

【資料5】久葉昇技術少佐手記（1990年4月30日作成）

対米攻撃の中止（昭和十九年九月）

牛痘感染実験が成功〔1944年5月〕し、「牛痘ウイルスを風船爆弾に積載して実戦に応用するさい、その二十トン製造して米国の牛を攻撃、これを殲滅する方策について」会議が開かれた。参謀本部から作戦主任参謀、後方主任参謀、登戸研究所から草場季喜大佐（当時）、中村技師、久葉、満州一〇〇部隊・若松有次郎中佐（当時）、陸軍獣医学校・久池井中佐、農林省獣疫調査所・中村哲也所長が出席した。

会議の結論は、実戦に応用することが可能である、ということで意見が一致をみた。その後、参謀と会議出席者との間で種々議論が交わされ、参謀の発言があつてしばらく席を立った。一同待機していた。参謀は東条陸軍大将と打合わせた後、東条大将の意見として「牛痘ウイルスを、風船爆弾を用いて、米国内の牛を攻撃、これを殲滅した場合、我が国の稲を収穫期に焼却されるおそれがある」との理由で「粉末ウイルスの風船爆弾による使用は、これを中止する」との結論が出された。残念ながら実戦に応用することを中止するの止むなきに至つたのである。

出典：「久葉昇の手記」、伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版、2001年）104頁所収。原資料は、久葉昇「陸軍第九技術研究所第六研究班研究概要」（1991年4月30日作成、明治大学平和教育登戸研究所資料館所蔵）。

【資料6】支那派遣軍総司令官・畑俊六日誌 1944年7月15日

衡陽の攻撃は弾薬の不足に帰因し、十五日より再興することとなり且迫撃砲を以てする赤筒の使用は相成らずとのことにて、第十一軍は折角相当赤筒を準備したるに大本営は重慶の宣伝に驚き、瓦斯弾の使用は米をして瓦斯使用の口実を得せしめるものとし、折角の処て使用を停止せられ

出典：『続・現代史資料 4 陸軍 畑俊六日誌』（みすず書房、1983年）475頁。

【資料7】『昭和天皇実録』1944年10月25日

夕刻、御学問所において参謀総長梅津美治郎に謁を賜い、我が軍及び欧洲の戦況につき奏上を受けられる。また、参謀総長より米国本土への特殊攻撃に関する命令につき上奏を受けられる。この日、大陸指を以て参謀総長より気球聯隊長に対し、米国内部擾乱等を目的として十一月初旬頃より米国本土への特殊攻撃【富号試験】を実施すべき旨を命じる。

出典：宮内庁編修『昭和天皇実録』第九（東京書籍、2016年）470～471頁。

【資料8】大陸命第1162号 1944年10月25日

- 一 大本営ハ米国内部擾乱等ノ目的ヲ以テ米国本土ニ対シ特殊攻撃ヲ企図ス
- 二 参謀総長ハ概ネ十一月初頭ヨリ明春頃ニ亘リ米国本土ニ対シ特殊攻撃ヲ実施スヘシ

三 攻撃企図ノ秘匿ニ関シテハ厳ニ注意スヘシ

昭和十九年十月二十五日

奉勅伝宣

参謀総長 梅津美治郎

参謀総長 梅津美治郎殿

出典：森松敏夫監修『「大本営陸軍部」大陸命・大陸指総集成⑨ 昭和 19 年』（エムティ出版、1994 年）291 頁。

【資料 9】大陸指第 2253 号 1944 年 10 月 25 日

命令

一、米国内部擾乱等ノ目的ヲ以テ米国本土ニ対シ特殊攻撃ヲ実施セントス

二、気球連隊長ハ左記ニ準拠シ特殊攻撃ヲ実施スベシ

(一) 実施期間ハ十一月初頭ヨリ明春三月頃迄ト予定スルモ状況ニ依リ之カ終了時期ヲ更ニ延長スルコトアリ 攻撃開始ハ概ネ十一月一日トス 但シ十一月以前ニ於テモ気象観測ノ目的ヲ以テ試射ヲ実施スルコトヲ得 試射ニ方リテハ、実弾ヲ装着スルコトヲ得

(二) 投下物料ハ爆弾及焼夷弾トシ其概数左ノ如シ

十五珎爆弾 約七五〇〇箇／五珎焼夷弾 約三〇〇〇〇箇／十二珎焼夷弾 約七五〇〇箇

(三) 放球ハ約一五〇〇〇箇トシ月別放球標準概ネ左ノ如シ

十一月 約五〇〇箇トシ五日迄ノ放球数ヲ勉メテ大ナラシム

十二月 約三五〇〇箇／一月 約四五〇〇箇／二月 約四五〇〇箇／三月 約二〇〇〇箇

放球数ハ更ニ一〇〇〇箇増加スルコトアリ

(四) 放球実施ニ方リテハ気象判断ヲ適正ナラシメ以テ帝国領土内並ニ「ソ」領ヘノ落下ヲ防止スルト共ニ米国本土到達率ヲ大ナラシムルニ勉ム

三、機密保持ニ関シテハ特ニ左記事項ニ留意スヘシ

(一) 機密保持ノ主眼ハ特殊攻撃ニ関スル企図ヲ軍ノ内外ニ対シ秘匿スルニ在リ

(二) 陣地ノ諸施設ハ上空並ニ海上ニ対シ極力遮断ス

(三) 放球ハ気象状況之ヲ許ス限リ黎明薄暮及夜間ニ実施スルニ勉ム

四、今次特殊攻撃ヲ「富号試験」ト呼称ス

昭和十九年十月二十五日

参謀総長 梅津美治郎

気球連隊長 井上茂 殿

出典：森松敏夫監修『「大本営陸軍部」大陸命・大陸指総集成⑨ 昭和 19 年』（エムティ出版、1994 年）532 頁。

【資料 10】陸軍侍従武官『坪島文雄日記』1944 年 12 月 21 日

一、米国側我フ号に対し発表（日本字、森林中に不発弾を発見）不発弾なからしむること、我方も発表国民志気昂揚に資するの可否に就て武官長に御下問あり 参謀本部に連絡す

出典：陸軍侍従武官『坪島文雄日記』1944 年 12 月 21 日の条（国立国会図書館憲政資料室所蔵）

【資料 11】陸軍省軍事課「特殊研究処理要領」1945 年 8 月 15 日

特殊研究処理要領 二〇・八・一五／軍事課

一、方針

敵ニ証拠ヲ得ラル、事ヲ不利トスル特殊研究ハ全テ証拠ヲ隠滅スル如ク至急処置ス

二、実施要領

1. ふ号及登戸関係ハ兵本〔兵器行政本部〕草刈中佐ニ要旨ヲ伝達直ニ処置ス（十五日八時三十分）

2. 関東軍、七三一部隊及一〇〇部隊ノ件関東軍藤井参謀ニ電話ニテ連絡処置ス（本川参謀不在）

3. 糧秣本廠 1 号ハ衣糧課主任者（渡辺大尉）ニ連絡処置セシム（十五日九時三十分）

4. 医事関係主任ヲ招置 直ニ要旨ヲ伝達処置ヲ小野寺少佐及山出中佐ニ連絡ス（九時三十分）

5. 獣医関係、関係主任者ヲ招置 直ニ要旨ヲ伝達ス

土江中佐ニ連絡済（内地ハ書類ノミ）（十時）

出典：「特殊研究処理要領」『新妻清一所蔵文書（写）』（防衛省防衛研究所所蔵）、太田昌

克『731 免責の系譜』（日本評論社、1999年）189頁。原文の旧字は新字に改めた。